

2021 年度FD活動報告

フェリス女学院大学 FD 委員会
委員長 (学長) 荒井 真
副委員長 (教務部長) 小ヶ谷 千穂

FD 活動の主な目的は「教員が授業内容・方法を改善し向上させること」にあり、また現代は、その活動を学内外に公表することが義務づけられています。フェリス女学院大学は、これまでも、さまざまな活動に取り組み、継続的に諸活動を推進してきました。

2021 年度は、新型コロナウイルス感染症への対応を開始してから 2 年目を迎えました。大学 FD 講演会では、テーマを「ハイブリッド授業の特徴について考える」として、語学科目・講義科目・演習(ゼミ)科目のそれぞれの事例に基づき、学生たちの視点も踏まえて、実際の運用と課題を考える機会をもちました。

また、各所管からの課題として挙がっていた「障がい学生支援」について、当初の予定では 2022 年度に扱う予定でしたが、このテーマの関心度が高いことを考慮して、急遽 2021 年度大学 FD 勉強会として開催しました。多様性をもった学生の受入に向けて、今後も継続して情報共有や意見交換をする場をもち、取り組んでいくことが確認されました。

さらに、2021 年度は中期計画に沿って「各所管における FD 勉強会」を積極的に開催することとし、大学の FD 活動の活性化につなげることができました。

その他、例年どおり授業アンケートや学修行動調査、卒業生調査を実施し、学生の実態を把握するための情報収集に努めた一方、大学院では博士後期課程の学生に対して、教育能力向上のために FD 活動への参加を課すなどの取り組みも継続しています。

目次

1. 大学 FD 講演会報告	2
ハイブリッド授業の特徴について考える ～授業開始後に見えてきた実際の運用と課題～	
2. 大学 FD 勉強会報告	
第 1 回 データサイエンス勉強会	6
第 2 回 障がい学生支援を考える ～私たちはどのように受け入れ、どのように支えるのか～	9
3. 学修行動調査	14
4. 教育の質向上に向けた取り組み	
授業アンケートと授業改善計画	15
卒業生調査	15
PBL 科目の推進	16
大学院の FD 活動	16
5. 2021 年度活動内容	17

講演会の概要

日時：2021年6月16日（水） 17：00～18：00

会場：オンライン（Zoom）

題目：ハイブリッド授業の特徴について考える

～授業開始後に見えてきた実際の運用と課題～

プログラム

- ・はじめに
- ・事例発表（語学科目、講義科目、演習（ゼミ）科目）
- ・質疑応答
- ・まとめ

コーディネーター：小ヶ谷大学FD委員会副委員長（教務部長）

発表者：

語学科目 空 由佳子 准教授（国際交流学部国際交流学科）

《協力学生》音楽芸術学科1年次生

講義科目 林 充之 非常勤講師（全学教養教育機構）

《協力学生》英語英米文学科3年次生

コミュニケーション学科2年次生

演習（ゼミ）科目 上原 良子 教授（国際交流学部国際交流学科）

《協力学生》国際交流学科4年次生

挨拶：荒井 真 学長（大学FD委員会委員長）

対象者：本学教職員（非常勤教員含む）及び博士後期課程学生

出席者：学長、専任教員31名、非常勤教員6名、副手1名、

職員33名、院生1名、協力学生4名

ビデオ閲覧：専任教員1名（国際1）、

非常勤教員4名、副手2名、職員3名、院生2名

（2021年7月13日現在）

講演会ポスター

2021年度第1期大学FD講演会

ハイブリッド授業の特徴について考える
～授業開始後に見えてきた実際の運用と課題～

◆日時 2021年6月16日（水）17：00～18：00
◆会場 オンライン（Zoomを予定）
◆対象者 本学教職員（非常勤教員含む）及び博士後期課程学生

◆コーディネーター 小ヶ谷 千穂 大学FD委員会副委員長（教務部長）
◆発表者 語学科目：空 由佳子 准教授（国際交流学部国際交流学科）
講義科目：林 充之 非常勤講師（全学教養教育機構）
演習（ゼミ）科目：上原 良子 教授（国際交流学部国際交流学科）
※発表者の他に、各科目を担当する学生が参加します。ハイブリッド授業について、学生の声を聞く貴重な機会となりますので、是非ご参加ください。

◆プログラム
・はじめに
・発表 30分（3テーマ×10分）
（語学科目、講義科目、演習（ゼミ）科目）
・質疑応答 20分（3テーマ共通）
・まとめ

＜開催趣意＞
本学がコロナウイルス感染症への対応のため、2021年度前期の授業については、多くの授業で対面及び遠隔を組み合わせたハイブリッド授業を実施している。授業開始前にハイブリッド授業がもたらしたことで期待された効果も確認されている。一方で、各授業科目においてハイブリッド授業に関する課題も確認されている。このような状況を受けて、本学教員からの具体的な事例に基づいた報告や課題の観点からのコメントを基に、ハイブリッド授業の特徴について考える機会をもつ。

主催：フリスカ国際大学FD委員会
問い合わせ先：教務課FD企画（11F、38号）
TEL:045-812-4818

1. はじめに 小ヶ谷大学FD委員会副委員長（教務部長）

2021年度前期は多くの授業科目でハイブリッド授業を実施することとなり、実際に授業を開始してみると、授業実施形態ごとに課題や悩みが浮かび上がるとともに、学生からもハイブリッド授業に関するさまざまな意見が寄せられている。

今後、本学におけるハイブリッド授業を円滑かつ充実したものとするため、全学生に対し、ハイブリッド授業に関するアンケートを実施した（実施期間：2021年5月17日（月）～24日（月）、回答率：30.6%（一部重複あり））。アンケートの結果、学生から「授業が円滑である」旨のコメントが多かった3名の教員から、それぞれ語学科目・講義科目・演習（ゼミ）科目の観点でハイブリッド授業の具体的な実施方法や工夫、課題を共有してもらうとともに、それぞれの授業を履修している学生からもコメントをもらうことで、改善策を探っていくきっかけとしたい。

2. 事例発表及び履修学生のコメント

2-1. 語学科目 空 由佳子 准教授（国際交流学部国際交流学科）

《協力学生》音楽芸術学科1年次生（遠隔受講）

【授業について】

- ・初習外国語科目は、実践的な語学運用能力を得るために、教員と学生のインタラクティブな活動が不可欠。
- ・担当科目である「フランス語 I（入門）」は、発音、文化、文法・会話の3つの観点から授業を行っており、「平易なフランス語でコミュニケーションできる」ことをねらいとしている。
- ・「フランス語 I（入門）」では実践を重視しており、シャドーイングや口頭練習は対面・遠隔いずれの場合でも1回は発言できるよう配慮している。

【ハイブリッド授業における工夫】

①パワーポイントの活用

- ・文法の仕組みを視覚的に示したり、複数の語彙を入れ替えながら練習を行うことができる。
- ・遠隔受講者にとって、黒板への板書よりパワーポイント画面の方が見やすい。授業で使用したパワーポイントは Google クラウドにアップしてフォローする。

②小型スピーカーの活用

- ・PC に直接つなぎ、対面受講・遠隔受講いずれの声も届くように工夫し、教室とオンラインの垣根をなくすよう心掛けている。

【ハイブリッド授業における課題】

①遠隔受講者がミュートを外して発言する手間と時間のロスが生じる。

②学生のインターネット環境によっては、Zoom が繋がりにくいこともある。

- ・学生のインターネット環境を整えるため、大学の支援が必要と考える。

③対面・遠隔の受講者が混ざることグループワークに制限がかかる。

- ・グループワークに参加できない学生がいる場合は、教員と学生の問答を増やして対応している。

【学生からのコメント】

①対面受講者より(コメント紹介のみ)

- ・対面・遠隔にかかわらず、学生が発言する機会が多いため、緊張感をもって授業に臨むことができる。
- ・パワーポイントを使用することで、板書する時間のロスがなく、また音声・画像・動画を交えて複合的に学ぶことができる。授業後は Google クラウドにアップされるので、復習もしやすい。

②音楽芸術学科 1 年次生(遠隔受講)

- ・発言の機会が多く、授業についていけないという感覚に陥ることがない。
- ・わからない箇所があれば、Zoom のチャットを利用して質問がしやすい。
- ・インターネット環境によるトラブルを教員に伝える際、Zoom のチャットに気付かれない場合があるので、改善が必要であると感ずる。

【まとめ】

- ・ハイブリッド授業は手間がかかるが、すべての学生に平等な教育を行うため、遠隔受講者に対しても対面受講者とできるだけ近い学修環境を整える必要がある。
- ・コロナ後も遠隔授業を積極的に活用していくため、ハイブリッド授業のよりよい運用方法を模索していきたい。

2-2. 講義科目 林 充之 非常勤講師(全学教養教育機構)

《協力学生》英語英米文学科 3 年次生(遠隔受講)

コミュニケーション学科 2 年次生(対面受講)

【ハイブリッド授業における工夫】

①事前準備

- ・授業資料をパワーポイント化し、あらかじめ FerrisPassport にアップ。すべての学生が授業前に資料を準備できるようにしている(対面受講者には印刷物を配布)。

②授業開始前

- ・速やかに授業を開始できるよう、講師控室で Zoom の立ち上げ、マイクやスピーカーの接続テストなどを行った状態で教室に移動している。

③授業中は教室用マイクと Zoom 用ピンマイクを併用

- ・遠隔受講者にとっては Zoom 用ピンマイクの方が聞こえやすい。

④出欠は FerrisPassport の機能「スマホ出席」を活用

⑤演習について

- ・遠隔受講者の演習は、授業開始前に FerrisPassport またはレジюмеに Google フォームのアドレスを記載し、Google フォーム上で回答をもらう。
- ・対面受講者の演習は、レスポンスシートに記入してもらう。

⑥授業後のサポート

- ・オンタイムのライブ授業を前提としているが、インターネットの接続状況が悪く、聞き取れない部分があった学生のために毎回の授業を録画し、YouTube にアップしている(ただし、YouTube は履修者全員に公開しているわけではなく、インターネットの接続状況等で受講に問題が生じた学生のみに公開)。

【ハイブリッド授業についての所感】

- ・事前準備が重要である。授業資料については本編のみならず、前回授業に対する質問の応答や振り返り、連絡事項、ささいなコメントなどもすべてパワーポイントに落とし込み、すべての情報を「見える化」することを意識している。

【学生からのコメント】

①英語英米文学科3年次生（遠隔受講）

- ・授業開始前にZoomに入ると、すでに準備が整っている状態なのが良い。授業開始時間ちょうどに授業が始まるので、非常にスムーズ。質問の時間も確保されているため、わからないことがあれば質問もしやすい。
- ・板書ではなくパワーポイントを画面共有してくださるため、画面が見やすい。
- ・対面、遠隔受講のどちらでも差が出ないよう、FerrisPassportの出欠機能を利用するのが良い。
- ・毎回授業をレコーディングしてくださり、インターネット接続の不良等で聞き取れない箇所があっても、あとから復習できるので安心である。

②コミュニケーション学科2年次生（対面受講）

- ・他のハイブリッド授業では、遠隔受講者のための準備に時間がかかり、授業開始が遅れることがあるが林先生の授業ではそのような無駄な時間がなく、スムーズに授業が進行するので満足している。
- ・履修者がとても多い科目だが、遠隔受講者へのサポートも十分であるためか、対面受講者が多すぎて新型コロナウイルスの感染不安がある、というようなこともないので安心している。

2-3. 演習(ゼミ)科目 上原 良子 教授(国際交流学部国際交流学科)

《協力学生》国際交流学科4年次生(遠隔受講)

【ハイブリッド授業実施にあたり】

- ・ハイブリッド授業は手本となるものがなく、インターネット等を活用しながら自分のやりやすい形態を模索した。

【ハイブリッド授業における工夫】

①スピード

- ・短時間での授業準備、短時間で対面・遠隔授業を同時進行するため、事前の準備を入念に行う必要がある。
- ・連絡事項や配布資料はGoogleクラスルームとFerrisPassportにあらかじめアップする。授業終了後にも次回に向けた連絡事項などをクラスルームに掲載。

②つながり

- ・学生の孤立を避けるため、教員と学生または学生同士の密なコンタクトを心掛けている。
- ・出欠確認は、各自の状況報告や質問も兼ねて十分に時間をとり、丁寧に行う。
- ・ゼミ内では対面・遠隔受講に関わらずGoogleMeetを使い、グループごとに議論を行う。

③オンライン授業の快適さを目指す

- ・インターネット接続にトラブルがある学生がいた場合、授業を中断してでも、学生のサポートを行い、取り残すことがないように努めている。
- ・「音」を重視しているため、大学から用意された機材だけでは不足。対面・遠隔受講者が活発に議論できるよう、USBコンデンサーマイクを使用することで、教室全体の声を拾いやすくしたり、スピーカーを用意し、教室全体に声が届くよう工夫している。
- ・自前のルーターなどを持参し、大学の無線LANが接続不良になった場合にも備えている。
- ・ウェブカメラを使用する際は、三脚を使用して教室のあらゆる方向にカメラを向け、授業の様子が見えるように心がけている。
- ・今後も教室のサイズや自分の声質など、さまざまな機器を実験して自分に合うものを探していきたい。

④Googleクラスルームなどを活用し、必ず「文字化」する

- ・クラスルームのストリームを使用し、授業資料や授業内の連絡を見やすくしている。

【学生からのコメント】

①国際交流学科4年次生（遠隔受講）

- ・ゼミは対面の方がやりやすいことはもちろんだが、4年次生は卒業論文の進め方を個別に相談するスタイルなので、上原先生のオンライン授業には満足している。
- ・大学に対して、機材の重要性を訴えたい。音が悪く、授業に集中できない授業も多々ある。大学には、ぜひともオンライン授業の配信環境を整えてほしい。また、教員同士もよい機材を共有するなどしてほしい。

3. 質疑応答

項番	質問	回答
1	(林非常勤講師への質問) 授業中、ピンマイクを繋ぎ、教室のマイクと共用するとのことだが、ハウリングの心配はないか。	(林非常勤講師) 授業実施当初はやはり混線したが、無線の周波数を変えることで改善した。
2	(すべての先生への質問) パワーポイント等を用いたり、事前資料を配布することの重要性を再認識したが、学生から質問を受けて、その質問が直接授業の展開に影響するようなものであった場合、軌道修正などはどのように対応しているのか。	(空准教授) 語学の場合は文法に関する質問が多いので、授業内容に直接影響があるような質問が来ることは少ない。 (林非常勤講師) 質問は授業の最後に受けて、次回授業時の前半で取り扱うので、その場で授業内容が発展することはない。あくまでもすべて「見える化」することを心掛けている。 (上原教授) オンライン上で資料となるデータを共有しながら、リアルタイムに手を加えることもある。その場合は、授業後に Google クラスルームにアップし、学生が確認できるようにしている。
3	(すべての先生への質問) 従前の「対面授業」と、今年度から実施している「ハイブリッド授業」において、授業実施方針や構成など、やり方が変わった部分はあるか。	(林非常勤講師) ・対面の場合はすぐにリアルタイムで対応できる(変化できる)が、遠隔の場合はあらかじめ決まった流れでしかできないという点が変わった。 ・「見える化」するため、パワーポイントの枚数が非常に増えた。 (空准教授) ・従来の授業スタイルでは、ある程度板書を活用していたが、ハイブリッド授業においては限界を感じたので、板書はすべてパワーポイントに切り替えた。 ・準備した資料だけでは対応できない場合もあるのでそのような場合はパワーポイントに直接書き込み、授業内で共有している。
4	(履修学生への質問) ハイブリッド授業の準備に時間がかかると学生の参加意欲がそがれるのではと懸念している。授業実施前にやっておいてほしいことがあるか。どのようにすればスムーズに授業に入りやすいと考えるか。	(英語英米文学科3年次生) 対面で参加している授業の内、遠隔受講者への対応のためかなりの準備時間を割く先生がおり、対面受講者にとっては待ち時間が長いので、そのような時間を使って学生自身で進めておけることを指示してほしい。

4. おわりに

4-1. 講評：小ヶ谷大学 FD 委員会副委員長(教務部長)

事例報告において共有されたハイブリッド授業実施の工夫を聞くと、事前準備をいかに丁寧に行うかにより、授業の充実や学生の受け止め方にも影響してくることに改めて気が付くことができた。授業機材や授業実施スタイルも自分に合うものを整えていくことで、大学全体としてよりよい授業を目指していきたい。

4-2. 挨拶(荒井 真 学長(大学FD委員会委員長))

対面受講者・遠隔受講者ともに授業を「見える化」することで両者の差をなくすことが重要であり、そのための事前準備の重要性について、改めて考えることができた。これからも授業実施に関する工夫や知恵を出し合いながら、よりよい授業運営ができるように心がけたい。

勉強会概要

日時：2021年7月14日（水） 18：00～19：00
会場：オンライン（Zoom）
題目：データサイエンス勉強会
プログラム
・はじめに
・事例発表（教職課程・コミュニケーション学科の取り組み、コミュニケーション学科の取り組みの実際）
・質疑応答
・まとめ
コーディネーター：小ヶ谷大学FD委員会副委員長（教務部長）
発表者：
教職課程・コミュニケーション学科の取り組み
山崎 浩一 准教授（教職課程主任・文学部コミュニケーション学科）
コミュニケーション学科の取り組みの実際
高田 明典 教授（文学部コミュニケーション学科）
挨拶：荒井 真 学長（大学FD委員会委員長）
対象者：本学教職員（非常勤教員含む）及び博士後期課程学生
出席者：学長、専任教員15名、非常勤教員1名、職員20名
ビデオ閲覧：専任教員2名、副手1名、職員6名
（2021年8月6日現在）

1. はじめに：小ヶ谷大学FD委員会副委員長（教務部長）

近年、社会的にビッグデータの必要性や意義について議論されている。また、昨年からの新型コロナウイルス拡大の影響により、データ分析力やデータサイエンスリテラシーの必要性について、実感を持って、一層強く認識されてきている。その必要性については、既存の文系・理系を架橋するような学士力として、文部科学省からも提案がされており、本学としても、全学的に数理的思考を鍛えることやデータサイエンス教育を重点化していくことが必要であるという意識が高まってきている。今回の勉強会では、データリテラシーを学ぶ科目群（選択必修Ⅱ）を有するコミュニケーション学科の取り組みの事例発表を軸として、高等学校のカリキュラム変更にいち早く対応が求められる教職課程の今後及び学科における専門的な教育実践の方法について共有し、本学におけるデータサイエンス教育について考えたい。

2. 事例発表

2-1. 教職課程・コミュニケーション学科の取り組み 山崎 浩一 准教授（教職課程主任・文学部コミュニケーション学科）

【Society5.0時代の到来】

- ・Society5.0とは、サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会のこと。
- ・IOTで全ての人とモノが繋がっている時代で、ICTについての能力・技能をしっかりと身に付けていくことが求められている。

【Society5.0の求められる人材像】

（「新しい時代の初等中等教育の在り方について（諮問）」平成31年4月17日 中央教育審議会資料より）

- ・共通して求められる力：文章や情報を正確に読み解き対話する力。
科学的に思考・吟味し活用する力。
価値を見つけ生み出す感性と力・好奇心・探求力。
- ・新たな世界を牽引する人材：技術革新や価値創造の源となる飛躍知を発見・創造する人材。
技術革新と社会課題をつなげ、プラットフォームを創造する人材。
様々な分野においてAIやデータの力を最大限活用し展開できる人材。

【GIGA スクール構想】

- ・1人1台端末と、高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備することで、誰一人残すことなく、公正に個別最適化され、資質・能力が一層確実に育成できる教育 ICT 環境を実現する。
- ・検索サイトを活用した調べ学習や文章作成ソフト、プレゼンソフトの利用、一斉学習の場面での活用、一人ひとりの学習状況に応じた個別学習など、誰でも使える ICT を活用することが今後の教育現場となっていく。

【教職課程における ICT 活用案】

- ・ICT の技能や知識を身に付けていくこと、そして、ICT を活用する授業、児童・生徒を支援できる教員を育成することが教職課程において求められている。
- ・データ分析だけでなく、データから何を読み解くのか、どのように活用していくのか、新しい価値を生み出していくことについての学びの場を大学で作っていく必要がある。
- ・2025年には全ての大学生等が「数理・データサイエンス・AI に対応した科目」について履修できるような環境を整備することが、文部科学省から提案されている。

【データサイエンス】

- ・データサイエンスとは莫大かつ多様なデータを活用し、新たな価値を生み出すための学際研究である。
- ・新たな価値を生み出すためだけでなく、自分自身でデータを分析することや、データを収集していく方法を身に付けるなど、データに対するセンシティブリティを醸成していくことが必要である。

【データに対するセンシティブリティ】

- ・コミュニケーション学科の「心理学実験演習」、「社会・心理調査の方法」、「行動科学のためのデータ解析」などの科目は、センシティブリティを醸成させるような内容となっている。特に、「心理学実験演習」では、それだけに留まらず、社会還元（データから新しい価値を生み出す）についても考えるということも実践している。

2-2. コミュニケーション学科の取り組みの実際 高田 明典 教授（文学部コミュニケーション学科）

【潜在意味分析（Latent Semantic Analysis（以下 LSA））】

- ・大量のテキストを機械処理して「語と語」、「文と文」の対立関係を抽出する手法。
 - ・「潜在意味」という呼称は「対立関係（二項対立）の中に「意味」を見出すことができるという考えに基づいている。
 - ・意味が近接している（類似している）単語は、同じ文の中に現れる確率が高い。（共起確率）
- テキスト分析が可能になったことにより、数万の文の収集において、そのような「類似（もしくは類似に基づく対立）」を抽出できるはずであると考えられている。

【コミュニケーション学科（ゼミ）で実施していること】

- ・ネット上データの意見構造分析
- ・映画や小説などのレビューによる訴求構造分析
- ・商品レビューの分析
- ・歌詞などの訴求構造分析

【潜在意味分析（LSA）処理の概要】

- ① テキストデータの収集
 - ・手作業収集は可能だが、時間と労力がかかる。ソフトウェア等による自動収集（scraper）が好ましいが、scraping 対策を施しているウェブサイトもあり、困難が伴うこともある。
- ② テキストデータの整形
 - ・収集したテキストデータを LSA 処理可能なように「整形」する。
 - ・Bag of Words（単語の鞆）にするのが基本的な LSA の処理のため、「自然文」のまとまりにすることが求められる。このとき意味を構成する単位が重要となる。
- ③ 形態素解析
 - ・②までに抽出された自然文を、形態素解析する。
 - ・形態素解析器（ソフト）はいろいろあるが、性能や特徴が異なる。
- ④ 単語-対象文共起行列（Word-Sentence Collocation Matrix）の作成
 - ・「共起行列」とは、ある文に、どの単語が含まれているかを示す行列。

⑤共起行列の特異値分解

- ・数値処理の一つ。「固有値問題」と数理的にはほぼ同義。
- ・共起行列 (M) を三つの行列に分解して表現する。 $M=U$ (単語ベクトル) $\times \Sigma$ (特異値ベクトル) $\times V^t$ (文ベクトル)

⑥各軸の解釈

- ・単語得点と文得点を見て、その軸が何を意味しているのかを考え、軸に「名前」を付ける。この手順は、「主成分分析」、「因子分析」においてのものと同じである。

⑦訴求構造/意見構造の推定

- ・各軸の解釈をもとに、訴求構造や意見構造を推定する。

【参考事例】

- ・米津玄師とサザンオールスターズの歌詞の比較分析
- ・画像を基にした累積寄与率の説明

3. 質疑応答

項番	質問	回答
1	(高田教授への質問) 説明のあった手法を利用した分析結果をどのように活用していくべきか。	(高田教授) 流行しているものは、現代に生きる我々を映す鏡だと考えている。例えば事例でとりあげたようなミュージシャンの歌詞を比較すると、若者にとって、より時流や心情に近い方が好まれる。すなわち流行しているものを研究することは、若者の考え方を知ることにもつながる。 他にも、流行のロックバンドの歌詞を分析すると、社会と自身が対立関係にある（社会を敵ととらえている）ものが多く、これは若者のメッセージであると言える。社会がこのような事実に早く気がつくことができるよう、事例で紹介したような研究を行っている。
2	(高田教授への質問) 質問1に関連して、この手法は、「フェリス」で何か活用できないか。	(高田教授) 過去に学生が「フェリス」について Twitter のデータを使って、分析をやってみたが、中々思うような結果は得られなかった。「フェリス」で活用というのは難しい。(データが良質であることが前提のため。)
3	(高田教授への質問) テキスト分析について、本学の授業で活用できるソフトウェアなどがあれば共有していただきたい。	(高田教授) テキスト分析について市販のものは、正直使いにくいということがあり、まだツールが整備されていない。役に立つものもあるが、高価である。
4	(山崎准教授への質問) 教職課程について、ICT 活用、電子黒板など、今後見直しをしていく中ではどのようなものが必要となるか。	(山崎准教授) 学生たちが教育実習先で右往左往しないようにするという観点で、環境整備についてしっかりと対応する必要がある。
5	(山崎准教授への質問) データを分析して「新しい価値」を生み出すとは何か。	(山崎准教授) 本人にとって新しい知見や構えができれば十分であり、それが積み重なっていくことで社会が変わっていくものであると考えている。

4. おわりに：山崎 浩一 准教授（教職課程主任・文学部コミュニケーション学科）

今後、求められるデータサイエンス教育とは、コミュニケーション学科の授業で実践しているような専門的な部分であり、教員も学生もデータサイエンスに対する技能や構えというのが必要になってくる。データを分析して新しい価値を生み出すということは、どの学科でも共通していることであるため、適切な科目やサポート体制を大学全体で作っていかねばならないと考えている。

勉強会概要

日時：2022年1月26日（水） 16：30～19：00

会場：オンライン（Zoom）

題目：障がい学生支援を考える

～私たちはどのように受け入れ、どのように支えるのか～

プログラム

- ① 開催の経緯および趣旨の提示等
- ② 学内の障がい学生支援体制および制度にかかる情報提供
- ③ 授業内における障がい学生支援にかかる事例共有
- ④ 小グループによるラウンドテーブルディスカッション
- ⑤ ラウンドテーブルディスカッション内容の全体共有
- ⑥ 全体のまとめおよび今後の展望について

司会・進行：小ヶ谷大学FD委員会副委員長（教務部長）

発表者：②小俣 有可 保健師（学生支援センター）

- ③パトリック スコット ヘラー 准教授（全学教養教育機構）
- 高雄 綾子 准教授（国際交流学部）

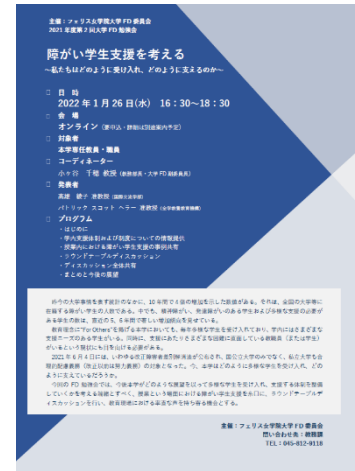
挨拶：荒井 真 学長（大学FD委員会委員長）

対象者：本学専任教職員（アーカイブ配信のみ一部の非常勤教員に公開）

出席者：学長、専任教職員 22 名、職員 16 名

アーカイブ閲覧のみ：専任教職員 9 名、非常勤教職員 1 名、副手 1 名、職員 17 名

勉強会ポスター



1. 開催にあたって：小ヶ谷大学FD委員会副委員長（教務部長）

近年、大学に在籍するさまざまな障がいを持つ学生は増加している。本学においても、毎年多様な学生を受入れており、支援ニーズもさまざまである。また、障がいをもつ学生と日々の授業や業務で接する中で、多くの課題に直面している教職員がいるということも分かってきた。

2021年の法改正に伴い私立大学も合理的配慮の義務化が求められることになった今、教育理念に「For Others」を掲げる本学が、多様な学生を受け入れ、どのように「ともに学んでいく」機会を作れるかは、たいへん重要な課題である。

本日の勉強会では、今後本学がどのような展望をもって、多様な学生と「ともに学ぶ」体制を整備していくことができるかを考えるきっかけとして、まずは本学のもつ障がい学生支援の枠組みについて共有したい。さらに、障がい学生のいるクラス運営の実例について、2名の教員から事例発表をしてもらおう。その後、小グループに分かれて参加者同士の意見交換、事例発表等をきっかけに考えたことなどを共有し、最後に全体で課題や今後の展望について考える時間をもちたい。どのような意識改革や体制整備が求められているのか、話し合う機会にできればと考えている。

2. 学内の障がい学生支援体制および制度に係る情報提供：小俣 有可 保健師（学生支援センター）

【文科省の提示する障害者施策の流れについて】

- ・平成25年に「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（障害者差別解消法）」が公布され、平成28年には「障害者差別解消法」の措置が具体化された。令和3年の法改正を受けて、国立大学だけではなく、私立大学も合理的配慮義務の対象となった。
- ・「障害のある学生等に対する大学の支援に関する調査 ―発達障害を中心として― <調査結果に基づく改善通知>」によると、大学選びから受験時の支援、授業等・学生生活全般の支援、就職活動の支援など、入学前から卒業までのトータル的なサポートを受けられる体制をとっていく必要がある。

【障害のある学生の在籍者数】

- ・日本学生支援機構のまとめた「令和2年度大学・短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の就学支援に関する実態調査」によると、平成26年度頃から障がいのある学生は急激に増えていることがわかる。
- ・本学の障がいのある学生の在籍者数も、日本学生支援機構と同じ推移で増加している。「学生状況連絡票」の

発行件数も増加している。割合的には精神障害が約半数(48%)、次いで発達障害(16%)、病弱・虚弱(14%)、視覚障害(13%)、肢体不自由(7%)、聴覚障害(1%)と続いている。

【本学における障がい学生受入れについて】

- ・入試前(試験時の配慮・入学後の配慮)
- ・入学が決定してから
- ・入学後の4月初旬に実施する健康診断の際
- ・大学生活開始、授業開始、学期の途中
- ・就職活動の際
- ・先生から、他の学生から、親からの情報提供
⇒いつ支援を申し出ても対応することとしている。
早期のうちに適切な支援が始まるのが望ましいが、上記のとおりさまざまなタイミングで学生自身が支援の必要性を認識するため、状況に応じて対応をしている。
- ・支援が必要な学生が申し出ることができるよう、入試出願ページ・ホームページ・各種パンフレット等で周知を行っている。また、必要に応じて入学前の面談や大学生活の準備等(通学訓練、歩行訓練など)も行っている。

【学生支援センターの役割】

以下に記載の3室と学生課長で、支援学生の状況を毎週共有している。新たな支援の必要があれば、学生支援センターとして検討を行う。

- ①バリアフリー推進室：主に視覚障害、肢体不自由、聴覚障害の学生のサポートを行う。
- ②保健室：主に内部障害(難病、精神障害含む)、発達障害の学生のサポートを行う。
- ③学生相談室：学生のカウンセリングを行う。

【学生状況連絡票と配慮依頼文書について】

- ・学生状況連絡票：本人との面談後、教務課と学生支援センターで作成。
学生の状況を伝え、授業に関わる特記事項を過重な負担のない範囲で配慮を求める文書。
作成後、学生本人が科目担当者に提出。
- ・配慮依頼文書：障がい学生支援委員会で配慮事項を決定し、科目担当者に対応を求める文書。
作成後、学生支援センターから科目担当者へ状況を説明しつつ渡す。

【「障がい学生」特有の対応等】

「学生状況連絡票」、「配慮依頼文書」いずれも根拠資料(診断書等)に基づき、主な診断名は記載しているものの、それ以外にも障がい学生特有の対応も生じる。

- ・学生自身の性格に由来するもの
- ・2次障害に由来するもの
- ・教育課程、家庭環境が異なることに由来するもの
⇒個別性を重視した対応が求められることを認識する必要がある。

【障害者差別解消法の施行に向けて ～大学が準備すること～】

- ・令和3年改正障害者差別解消法が公布され、合理的配慮の提供が私立大学も義務となったため、最初から「対応できない」と言うことはできない。
- ・努力義務ではなく「義務」であることを教職員が認識し、意識する必要がある。
- ・施行(3年以内)までに必要な体制を整備することが推奨されているため、合理的配慮提供の範囲と適切な業務分掌など、大学一丸となって「どうやったら障がい学生も共に学べるか」を検討する必要がある。

3-1. 授業内における障がい学生支援に係る事例共有 : パトリック スコット ヘラー 准教授(全学教養教育機構)

From the Point of View of Language Instructors : 語学担当教員の観点から

- ①Initial reaction (shock) : 最初のリアクション
 - ・自分のクラスに障がいのある学生がいることを伝えられた時、教授法について特別なトレーニングを受けているわけではないので、「できないかもしれない」と考えた。非常勤教員も同様に考えたと思う。
- ②Basic assumptions of disabilities vs. realities : 障がいに対する思い込みと現実の比較

・障がいに対して基本的な想定として「何もできないのではないのか」と考えていたが、実際に障がい学生を教えたところ、高い英語力を持っていることがわかった。教員の思い込みに対して現実が異なるということを認識すること、それが重要だと思った。しかし、この学生が「何ができて何ができないのか」がわからない、というところが、最初の課題であった。

- ③Teacher-Student Communication (verbal and/or written) : 教員と学生間のコミュニケーション(口頭、筆記)
 - ・⑥にも関係するが、対面授業であれば教員は学生に直接説明できるが、授業外(FerrisPassport やメール)ではコミュニケーションが取りにくく、(特に視覚障がいの学生の場合)どのようにオンライン上でコミュニケーションを取るべきかというのは、とても難しいポイントである。
- ④Other parties involved in communication : 障がい学生支援に関わる人々
 - ・自分の経験上、障がい学生の指導は、教員 対 学生だけではない。学生支援センターや、学生の両親等、多くの人々とコミュニケーションを取っていく必要がある。特に非常勤教員は多くのクラスを担当しているため、それが過重な負担のひとつにもなっている。
- ⑤Class dynamics and group work : クラスダイナミクスとグループワーク
 - ・担当した障がい学生の英語力は素晴らしいが、グループワークは少し難しい。なぜなら、他の履修者の中に、障がいに対する不安や誤解がある学生がいると、そこでのグループワークの運営は難しくなるからである。
- ⑥Software capability other “tools” (at home vs campus or classroom) : ソフトウェア、その他のツール
 - ・障がいのある学生は様々なソフトウェアを使って情報を取得しているが、それらのソフトウェアを使うとどのようなことができて、またはどのようなことができないのか、教員が理解するのは難しい。特に視覚障がいの学生にとって FerrisPassport や Google クラクルームは使いにくいのではないのか。
- ⑦Instructor workload and limitation : 教員の負担と限界
 - ・特に語学のクラスにおいては非常勤教員も多いので、障がい学生を担当することは「追加の業務」と考えることが多く、それが負担感につながっていると思われる。教授法についてトレーニングの機会も必要ではないのか。

3-2. 授業内における障がい学生支援に係る事例共有 : 高雄 綾子 准教授 (国際交流学部)

とりわけ、視覚障がいの学生を初習外国語クラスで受け持った経験について共有する。

A-0. 学びとトランジションのサポート(授業)

- ・盲学校から大学へのトランジションが非常に難しい。学びの環境が大幅に変わる学生のサポートの在り方を考えていく必要があると感じた。

A-1. 講義部分

- ・事前に授業資料をバリアフリー推進室に送り、そこからテキスト化して当該学生に配布、学生が自宅で音声読み上げソフトを使って予習してくる流れであるが、教員にとって負担が大きい。また、初習外国語や専門用語では音声読み上げソフトの間違いも多い。
- ・図や写真のキャプションをつけ、授業内では説明を多くする必要があるが、他の学生にとっては冗長に感じられる。
- ・点字のメモをつかっていると思われるが、書いてあるものを教員や学生がみることができない。授業のスピードで理解して、作業がすすめられているのか、特にハイブリッドや遠隔授業ではわかりにくく、不安である。

A-2. 学生のワーク部分

- ・PC ができること、使っているアプリや機材について、教員がわからない。たとえばライティングの場合、余白や揃え、フォントのサイズなど、フォーマットを揃えることについて、実際にその場で指導するのは困難である。
- ・グループワークやフリーディスカッションで組んだ学生から、対応が難しいというような話も聞く。毎回同じ学生に負担が行かないよう配慮する必要がある。
- ・センシティブな問題を含むため、教員からは深く掘り下げられないが、本人からも周囲からも、ニーズや感想もあまり寄せられないため、授業に反映しにくい。

A-3. 試験、小テスト、成績

- ・一番の課題は試験である。
- ・その場で配布された問題を読み上げソフトで読むと、1.5 倍の試験時間では足りず、自宅に持ち帰り当日中にメールでの提出となった。こうなると同日に試験を行うことの意味がないため、試験問題の点字翻訳をデフォルトにできないか。
- ・1.5 倍の試験時間確保のため別室受験したが、別室の試験監督は、時間的、対応内容的に負担が大きい。試験監

督をどうすべきかも考えていく必要がある。

- ・担当教員は、本教室での試験監督もしながら、別室受験の対応ができるよう、準備しておく必要がある。逆に別室受験の方を担当教員が監督し、本教室を別の試験監督に依頼するという方法もあるか。
- ・しかし学生によっては「特別扱い」となる別室を好ましく思わないケースもあり、匙加減が難しい。
- ・成績はやはり相対的な評価とすべきか疑問。結果として個別指導・対応が多くなるので、このような場合の指針を大学として示してほしい。
- ・入試を経て受け入れたからには公平な評価とすべきか。担当教員だけでは悩んでしまうので、何らかの方針があるとよいのではないか。

A-4. サポート学生

- ・学生支援センターでは「本人の要望・意思」に基づき、なるべく先取り支援をしないよう、また本人の「自立」を妨げないよう、自分でできるところと難しいところと一緒に確認し合理的配慮を検討。
- ・授業間の移動サポートでは学生サポーターが見つからない時に職員がサポートにつくと、周りの学生が職員の方が来てくれるだろうと「他人事」としてとらえられてしまう懸念もある。
- ・授業の回数を重ねるごとに他の履修者ともコミュニケーションが取れて、授業内で学生同士助け合える雰囲気がかげばよいのだが、実際には、他の履修者は「どう対応しているかわからない」まま15回の授業を終えてしまう。

A 全般の課題

- ・属人的対応、個別の障がい状態への理解不足からくる不安、過介入・不平等への恐れ(合理的配慮の「合理的」の範囲はどこまでか)
- ・教員は、通常の業務範囲を超える判断が常に必要とされることで心理的負担が増加。
- ・サポートの範囲は本人の主体性や判断に任されているが、高校まで個別対応が中心の特別支援学級にいた障がい学生が、大学で急に自分のニーズを言語化することは困難。
- ・特別支援学級からのトランジションをスムーズにするため、サポートできる範囲をある程度明示し、選択肢を提供する必要がある。

A 全般の対応提案

- ・組織的な方針の明確化と体制の整備、当事者の幅広いニーズの把握、公平と平等の区別。
- ・通常より実務が増える教員の支援体制を整備する。(事前の授業内容作成、教材のテキストデータ化、図や写真のキャプションつけなど)
- ・点訳の体制を整備する(専門用語や特殊文字に対応する体制が必要)。
- ・別室受験の体制を整備する。
- ・成績評価の指針を作成する。
- ・自身のニーズを言語化できない場合があることを想定し、障がい学生が選択できるようなサポート内容リストを作成する。

B-0. 健常学生および教員が多様性と共生を学ぶ場づくり(環境)

- ・A では授業におけるテクニカルな話をしてきたが、学生同士で支えあったり、教員もともに学ぶことで、クラス内に協力的な雰囲気を作ることができるのではないか。まわりの学生や教員の対応次第では、A のような体制を整備しなくてもカバーできる部分もあるかもしれない。

B-1. 学生の多様性や共生への具体的な向き合い方の理解の欠如

- ・そこで、学生の多様性や共生への向き合い方をともに考える必要がある。
- ・通常の初習の入門は、毎週決まったメンバーで会うので最初の友達ができやすい場だが、当該学生は友達がなかなかできず、授業後に教員と話すことが唯一のコミュニケーションに。
- ・他の学生が授業中に発言しないため、当該学生が一人で話し続ける場面に、どう対応して良いか困ってしまう様子あり。
- ・大学生生活に慣れ、専門科目の授業が増えれば、共通の話題で話せる友達も多くなると思われるが、1年前期の必修科目では難しい。

B-2. 教員側の不安

- ・授業後に他の学生が先生に質問をしようと待っているのに、先生に質問し続けたり、話し続けていることもある。どこまで対応すれば良いか不明。

- ・学生の平等な扱いを心がけつつも、障がい学生への対応に時間と手間を割いてしまうことで、他の学生が不利益を被っていると感じるのではないかと不安になる。

B 全体の課題と対応提案

- ・課題: 学生も教員も、理想としての理念を理解しているものの、実際に行動に移し、共生することにはまだ慣れていない状態と言える。腫れ物に触るような感覚で進行せざるを得ない。
- ・対応: 障がい学生とともに学ぶことは、多様性を理解するだけでなく、一緒に生きていく力を育てていく絶好の機会であることを学ぶ体制を整備する。
- ・障がい学生との関わり方を含めたインクルーシブ教育を初年次に行う。
- ・教職員だけでなく、当事者の学生を含めた意見交換の場を定期的に設ける。

B-3. ワークショップ実践事例

- ・本学国際交流研究科博士前期課程の学生(NPO 障がい平等教育協会の認定ファシリテーター)をファシリテーターとして招き、「ドイツ語 I (入門)」内において、「障害平等研修」を行った。
- ・なお、ドイツ語の授業で実施した理由は、初習外国語は、全く言葉が分からない自分がマイノリティになるなかで学び続けるために、コンフォートゾーンから出るちからが必要となるからである。

B-4. ワークショップの反省と今後の可能性

- ・学生の他人事の態度が少し変わったように思うが、学期末に行ったため、もっと早く実施すれば良かった。
- ・オリエンテーションや、研究入門(国際)、導入演習などで実施できるとよいか。
- ・For Others を理解するだけでなく実践する場として位置づける。
- ・事前、事後に、当事者や学生、教職員の枠を超えた、定期的な意見交換の場が欲しいと感じた。
- ・A)の対応「(対応するかは別として)当事者の幅広いニーズの把握」とも関連する。

4. ラウンドテーブルディスカッション

- ・参加者が 7 グループに分かれ、約 40 分のディスカッションを行った。
- ・事前に配布したワークシートに沿って、次のとおり話し合った。
 - ①わたしの「支援」エピソード
 - ②本学の障がい学生受入れ・支援についてのわたしのアイデア

5. ディスカッションの全体共有 : 進行_小ヶ谷大学FD 委員会副委員長(教務部長)

(各グループからの意見、感想等は省略)

6. まとめと今後の展望 : 小ヶ谷大学FD 委員会副委員長(教務部長)

障がいあるいは多様な学生支援について、ある程度支援の定型化が必要である一方、学生個別に対応しなければならぬ部分があることを理解した上で、どこからどのように仕組みを組み立てていけるかを考えていく必要がある。マニュアル化すればよいというものではないので、状況に応じた支援を検討していきたい。また、教職員一人ひとりがゼロから経験を積み上げるのではなく、経験を大学全体として蓄積・共有することが重要である。

組織体制の整備と並行して、全学生に対し、本学は多様性をもった学生の受入を行っていること、多様性のある大学であることを初年次から印象づけて行く必要があるのではないかと。大学全体の方針として考えていくべきだと考える。

また、科目を担当する教員(特に非常勤講師など)へのサポートや連絡体制などは、今以上に充実させる必要がある。継続的な課題として取り上げたい。

7. 挨拶 : 荒井 真 学長(大学FD委員会委員長)

参加者の関心と熱意が感じられたFD勉強会であった。大学として一定の方向性は示しつつ、フレキシブルに対応すべき課題であることを改めて認識したので、「障がい学生支援」というテーマについて、今後も継続的にFD勉強会等で取り上げていきたい。

2021年度も昨年同様、Ferris学修行動調査、ALCS学修行動比較調査を実施しました。ALCS学修行動比較調査は他大学と共同で行うため、本学の強み、弱みを浮き彫りにし、今後取り組むべき課題を明らかにすることを狙いとしています。

【Ferris学修行動調査】

目的	(1) 学生の学修状況（学修時間の実態や学修行動）の把握 (2) 学修成果の把握及び教育の内部質保証
対象者	学部学生 2年次生・4年次生
実施方法	FerrisPassport のアンケート機能・Google フォーム機能利用
実施期間	2年次：2022年3月22日（火）～4月11日（月） 4年次：2022年3月17日（木）～31日（木）
回答率	第9回：42.0%（2022年3月17日付在籍者数：1,285名、回答者数：540名） ※2021年度9月卒対象者含む（23名） 参考：36.6%（2021年3月23日付在籍者数：1,156名、回答者数：423名） ※2021年度9月卒対象者含む（19名）
設問の概要	(1) 時間の使い方 (2) 授業での経験 (3) 学修への取り組み (4) 授業に対する意識 (5) 入学後から現在までの学修行動についての自己評価 (6) 本学の教育への満足度 (7) その他

【ALCS学修行動比較調査】

目的	(1) 学生の学修状況（学修時間の実態や学修行動）の把握 (2) 学修成果の把握及び教育の内部質保証 (3) 他大学間との比較分析による現状把握
対象者	学部学生 1年次生・3年次生
実施方法	専用 Web サイト
実施期間	2021年12月13日（月）～2022年2月10日（木）
回答率	52.7%（2021年11月9日付在籍者数：1,152名、回答者数：607名） 参考：28.5%（11月10日付在籍者数：1,229名、回答者数：350名）
設問の概要	(1) 経験（学修に関する経験） (2) 時間（時間外の活動量） (3) 成長（学修による変容の自覚） (4) 満足（学修関連の満足度） (5) 希望（学修に関連して望んでいること）

4-1

授業アンケートと授業改善計画

2021年度も授業アンケート及び授業改善計画を実施しました。授業改善計画は、授業アンケート回答に対する担当教員からの応答により、学生が自身の今後の授業への取り組み方や学修活動の振り返りにヒントを得ることを目的としたものです。授業改善の参考資料として引き続き活用いたします。

【授業アンケート】

対象	全科目	
実施方法	FerrisPassport の授業アンケート機能利用	
実施期間	前期	授業アンケート（通常科目）：2021年7月12日（月）～23日（金） 授業アンケート（集中講義）：第1ターム 7月29日（木）～8月11日（水） 第2ターム 8月30日（月）～9月10日（金）
	後期	授業アンケート（通常科目）：2022年1月11日（火）～1月25日（火） 授業アンケート（集中講義）：第1ターム 1月27日（木）～2月8日（火） 第2ターム 3月3日（木）～3月17日（木）
回答率	（前期）23.5% （後期）18.1%	

【授業改善計画】

対象者	全教員	
実施方法	FerrisPassport のアンケート機能利用	
実施期間	前期	授業アンケート（通常科目）：2021年7月28日（水）～8月18日（水） 授業アンケート（集中講義）：第1ターム 8月19日（木）～9月1日（水） 第2ターム 9月14日（火）～9月27日（月）
	後期	授業アンケート（通常科目）：2022年1月28日（金）～2月11日（金） 授業アンケート（集中講義）：第1ターム 2月10日（木）～2月28日（月） 第2ターム 3月19日（土）～3月31日（木）
提出率	（前期）86.7% （後期）80.8%	

4-2

卒業生調査

卒業生という外部の視点からも本学の教育の成果・効果を明らかにし、本学に対する期待、要望を把握することを目的として卒業生調査を実施しています。

大学時代にもっと熱心に取り組めばよかったと思う授業としては、毎年、語学科目や共通科目が挙げられます。自分の所属学科の科目だけではなく、幅広い関心を持つことの大切さを実感している卒業生の声を、在学生にも届けられるよう制度設計を行います。

また、本学で学んだ／出会ったことで今「とても役に立った」と思うこと（自由記述）の設問を新設しました。その結果、大学で学ぶ知識や経験のほかにも、For Others の精神、様々な人との出会いを糧にそれぞれ社会で活躍されていることが分かる結果となりました。

今後、本アンケートを継続して、カリキュラムの一層の充実を目指します。

【調査及び結果概要】

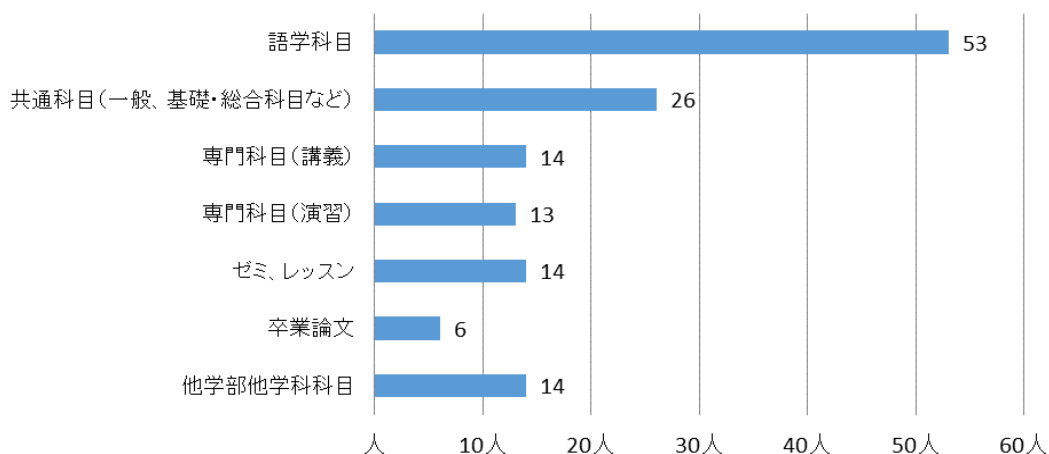
実施期間：2021年10月18日～11月19日

実施方法：葉書で依頼し、webにて回答

対象人数：525名（2016年3月出学者）

有効回答：71名（回答率13.5%）

大学時代にもっと熱心に取り組めばよかったと思う授業すべてにチェックをいれてください。



4-3

PBL 科目の推進

中期計画 21-25 PLAN のひとつである「PBL 科目の推進」として、PBL 科目における学生の活動経費（交通費等）の補助が挙げられます。

2021 年度は、支援対象科目 1 科目（履修者数 10 名）のうち、申請のあった 8 名に 20,412 円（予算執行率 11.3%）の支援を実施しました。

4-4

大学院の FD 活動

2020 年度より、教育能力向上を目的として、大学院博士後期課程学生にプレ FD を実施することが、大学 FD 活動計画に明記されました。対象の大学院生は、授業参観に参加して「FD 活動報告書」を提出しました。

授業参観に参加した大学院生は、授業の組み立て方や学生のコメントをいかに授業に活かすかを考える貴重な機会だったと振り返っています。

期間	テーマ、トピック	主催
4月2日(金)	新任教員対象アカデミック・アドバイザー説明会	大学FD委員会
4月3日(土)、24日(土)	FD オリエンテーション「ハイブリッド授業の実施方法及びその課題、新カリキュラムについて」	英語教育運営委員会
4月6日(火)	Ferris Passport 説明会	大学FD委員会
5月12日(水)	FD 勉強会「導入演習について」	国際交流学部
6月7日(月)～7月9日(金)	前期授業アンケート実施(授業への要望)	大学FD委員会
6月16日(水)	大学FD講演会「ハイブリッド授業の特徴について考える～授業開始後に見えてきた実際の運用と課題～」	大学FD委員会
6月7日(月)～6月25日(金)	専任教員による授業参観(対象:専任教員担当科目)	大学FD委員会
7月中旬～9月中旬	前期授業アンケート実施(学生の自己評価・成長)	大学FD委員会
7月14日(水)	第1回大学FD勉強会「データサイエンス勉強会」	大学FD委員会 コミュニケーション学科 教職課程委員会
7月21日(水)	FD 勉強会「言語センター正課外プログラム活性化に関する懇談会」	言語センター運営委員会
7月28日(水)～9月27日(月)	授業改善計画	大学FD委員会
9月8日(水)	FD 勉強会「ライティング指導について」	国際交流学部
9月8日(水)	FD 勉強会「今後の大学院のあり方について」	国際交流研究科
9月8日(水)	FD 勉強会「学生指導について～教育心理・教職課程の立場から」	音楽学部
9月29日(水)	FD 勉強会「新音楽研究科における選択科目の在り方について」	音楽研究科
10月11日(月)	教具説明会(遠隔授業対応)	大学FD委員会
10月13日(水)	FD 勉強会「CLA コア科目のカリキュラムについて」	CLA コア科目運営委員会
10月16日(土)	FD 勉強会「オンライン(ハイブリッド)授業への対応状況、新インテンシブ・コースの状況等」	英語教育運営委員会
10月18日(月)～11月19日(金)	教育の質向上に向けた取り組み-卒業生調査	大学FD委員会
11月15日(月)～1月7日(金)	後期授業アンケート実施(授業への要望)	大学FD委員会
11月17日(水)	FD 勉強会「日本語学習者の抱える課題を考えるープレゼンテーションクラスの教育実践の報告をもとにー」	留学生科目委員会
11月24日(水)	FD 勉強会「英米文化専門講読の運用例について」	英語英米文学科
12月1日(水)	FD 勉強会「初年次教育について」	国際交流学部
12月13日(月)～2月10日(木)	ALCS 学修行動比較調査(対象:1・3年次生)	大学FD委員会
1月中旬～3月中旬	後期授業アンケート実施(学生の自己評価・成長)	大学FD委員会

期間	テーマ、トピック	主催
1月26日(水)	第2回大学FD勉強会「障がい学生支援を考える ～私たちはどのように受け入れ、どのように支えるのか～」	大学FD委員会
1月26日(水)	FD勉強会「2021年度新設科目「初習外国語Vi(総合)」、「初習外国語VIi(総合)」の振り返りと今後の展望について」	初習外国語教育運営委員会
1月28日(金)～3月31日(木)	授業改善計画	大学FD委員会
2月22日(火)	FD勉強会「VOCALOIDから読み解く音楽テクノロジーとイノベーション」	音楽学部
2月22日(火)	FD勉強会「今後の日本語教員養成講座のあり方について」	日本語日本文学科 日本語教員養成講座委員会
3月17日(木)～4月11日(月)	Ferris学修行動調査(対象:2・4年次生)	大学FD委員会
4月～2月	教育の質向上に向けた取り組みーPBL科目の推進	大学FD委員会
4月～3月	教育の質向上に向けた取り組みー大学院のFD活動	大学FD委員会

以上